

## ルイス・キャロルを、今訪ねて

笠井 勝子 ・ 大八木 敦彦

### 1 ダーズベリ

今は亡き人物の足跡を訪ねるのは、過去への旅に他ならない。眼前に広がる風景は確かに現在のものなのだが、本当の眼は過去に向けられている。現在の風景の中に、過去の風景を見いだし、失われた時をよみがえらせながら、いわば二重の風景の中で旅を続けなければならない。

ルイス・キャロル、本名チャールズ・ラトウィッジ・ドジソンは1832年1月27日にチェシャー州ダーズベリの牧師館で生まれた。ダーズベリは、キャロルの生まれた当時人口200人ほどの小村であったが、今日でも、よほど詳細な地図でなければ見つけられないような小さな村であることに変わりはない。地理的にはイングランド西部マージー川の上流付近に位置し、ほぼ対岸にはリバプールがある。ノンセンスによってそれまでの童話の類型をくつがえしながら、児童文学の永遠の名作として世界中の子供ばかりか大人にも愛読される『アリス』の作者の生誕地と、それまで市民権を得ていなかったロックという若者の音楽によって、今世紀のあらゆる文化に一大革命を引き起こしたビートルズの故郷が、これほど接近しているのは興味深いことだ。(ジョン・レノンの幼い頃の愛読書が『アリス』であったことはつとに知られているし、彼の傑作『ルーシー・イン・ザ・スカイ・ウィズ・ダイヤモンド』が『アリス』のイメージに貫かれていることも周知のとおりである。)

リバプールは無論、ビートルズを観光産業

の最大の資源にしている、一步街を歩けば、彼らに関する絵はがきや地図やガイドブックはいやおうなく目に入り、博物館も車のツアーもある。それに比べてひっそりとしたダーズベリは、目下それらを準備中というところだ。キャロルの生家は1883年に焼失し、その跡地自体、1990年に発掘され、最近公開されたばかりなのである。このダーズベリ牧師館はかつて村の中心から1マイル半ほど離れた小高い丘の上に立っていた。キャロルは1860年に「炎の中の顔」(“Faces in the Fire”)という詩でこの地を回想している。

An island farm 'mid seas of corn,  
Swayed by the wandering breath of morn.  
The happy spot where I was born.

(孤島のような田舎の家よ

朝の気まぐれな風に波打つ実りの海の  
只中に浮かぶ楽園で私は生まれた)

今、この跡地に立つと、風は草原の海を吹き、小高い丘はそれだけで孤島のように感じられる。ここには、今引用した詩の一節を刻んだ長方形の石碑と、キャロルの生誕地であることを説明する2枚のパネルの他には何もなく、はるばるこの地を訪ねて来た者はいささか途方に暮れて立ちつくすかも知れないが、ある意味でこの漠とした空間ほど、キャロルにふさわしいものはないだろう。『鏡の国』にエピローグとして付した詩を、“Life, what is it but a dream?” (人生は夢に過ぎない)

の一行で閉じた彼の生涯が、まさしく夢のよ  
うなものであったことを、このしんと静まり  
返った跡地は何よりも強く感じさせるからだ。

キャロルが後年この地を再訪して、牧師館  
が火災に合う前に、その遠景を撮った写真が  
残されているが、それと見比べても今日の自  
然の景観はほとんど変わっていない。彼が11  
歳になるまでの間、毎日眼にしていたこの周  
囲の風景は、1世紀半以上経った今もほとん  
ど変化していないと思われる。遙かにつづく  
なだらかな丘の起伏といちめんの緑の海。後  
年アリスと共に「地下」へ潜り、地下の不思議の国を安住の地としなければならなかった彼にとって、光と風に恵まれた、この豊かな自然の中の牧師館は、ある意味で確かに「楽園」だったかも知れない。

現在、牧師館のだいたいの間取りは、地面  
に煉瓦や石で印されている。館は1820年頃に  
トーマス・ハドック (Thomas Haddock) と  
いう建築家によって建てられたのだが、その  
設計図が残されているのだ。決して裕福とは  
言えぬドジソン家にとっては、まず十分な広  
さを持った館のはずだったが、ここへ来て以  
後10人の子供が生まれるに至っては、さぞか  
し狭苦しい暮らしを余儀なくされたことだろ  
う。そのうえキャロルの父、チャールズ・ド  
ジソンは終身牧師補としての給料だけでは足  
りず、村の子供を集めて学校を開くというよ  
うな、いわばアルバイトをしなければ家計が  
成り立たなかった。父、チャールズはオクス  
フォード大学を優等で卒業した秀才だったが、  
ダーズベリに赴任してから、聖職禄を与えら  
れたクライスト・チャーチに対して給料の増  
額を訴える手紙をたびたび書いている。長男  
であるキャロルにとって「楽園」であったこ  
の地は、父のチャールズにとっては「苦園」  
でしかなかったに違いない。幼いキャロルに  
父の苦悶を知る由はなかったかも知れないが、  
堅忍かつ厳格な父チャールズも家族に対し

て・・・少なくとも子供に対して、自らの苦  
悩を見せるようなタイプでは決してなかった。  
驚くべき感情の抑制力と平衡感覚を持ち、家  
族愛も深い後年のキャロルの性格は確かに父  
親ゆずりのものだろう。

人間の精神が形成される極めて重要な10歳  
以前の子供時代を過ごした、このダーズベリ  
での日々に関して、あまり多くのことは知ら  
れていない。カタツムリやヒキガエルが好き  
だったとか、木登りをしたり泥灰土の採掘場  
を探検したという、家族の思い出話が残され  
ているくらいである。けれど少なくとも、前  
述のキャロル自身の詩を信ずるなら、まだ創  
作を始める以前の彼にとって、十分幸福な時  
代であったことは確かである。

牧師館について当時をしのばせるものが、  
ただ一つ残っている。それは修復された井戸  
だ (写真1)。



写真1 ダーズベリ牧師館跡の井戸

井戸には現在は、ティーポットに入ったヤ  
マネの凶柄の鉄格子で蓋がされており、無論  
水は涌いてはおらず、底には乾いた土が見え  
た。兎の穴でこそないが、ある意味で物語の  
入り口となる「地下」への通路だけが、こ  
うにはっきりと残されたわけである。

ダーズベリでは現在、「ルイス・キャロル・  
センター」を準備中であり、村の一角に立つ  
煉瓦による倉庫のような建物の扉には、既に  
「センター」の看板もかけられている。ここ  
で詳しい資料が収集、公開されれば、今後キ  
ャロルのダーズベリ時代にも新たな光が投げか

けられるに違いない。

ダズベリの村の中央部には、父チャールズが奉職していたオール・セインツ教区教会がある。煉瓦造りの古びたたたずまいの教会だが、こちらも当時のままで残されているのは塔の一部に過ぎず、大部分は1870年、即ちドジスン家がこの地を離れて27年後に作り直されたものであり、更に1932年にはキャロルの生誕100年を記念して新しいステンドグラスが設置された(写真2)。



写真2 オール・セインツ教区教会のステンドグラス

このステンドグラスには、ジェフリー・ウェブ (Geoffrey Webb) のデザインで、キリスト生誕の場面が描かれている。5分割された窓の中央に赤児のキリストが寝かせられ、向かって左端の窓にキャロルとアリスの姿が見える。キャロルの方は、今日彼の肖像としてよく用いられる28歳頃の写真とかなりよく似た表情と姿勢であり、おそらくこれをモデルにして、服を着せ換え、写真では本を持っている手を祈りの姿勢にして敬虔に合わせるようにしたのでないかと思われる。アリスの方は、無論テニエルの有名な挿画にこれと同じ絵はなく、似たような構図は幾つか見つかるのだが、全体の雰囲気からすると『鏡の国』の第3章で子鹿の首を抱くアリスの姿に最も近いように感じられる。ここは、いわゆる「名無しの森」のエピソードであり、二つのアリスの物語全編を通じて唯一アリスと周囲の存在に温かな心の交流が感じられる場面として

有名だが、その意味でも、キリストの誕生を見守る彼女の姿に移し換えるにはふさわしいと言える。そしてこれらの窓の下部には、ドーデーや、きせるを吸う芋虫など、おなじみのキャラクターが並んでいる。100年を経てキャロルたちの姿は、このダズベリへ戻って来たわけだが、当時父のチャールズは、何とかして待遇の悪いこの地を出ようと必死になっていた。彼がダズベリへ赴任して16年目、辛抱のかいあり念願かなって、一家はヨークシャー州クロフトへ引っ越すことになった。クロフトのセント・ピーターズ教会へ派遣されたのは父チャールズにとって栄転であり、キャロルにとっても人生の最初の転機となった。

## 2 クロフト

キャロルがクロフトへきたのは、1843年、11歳のときである。翌年からリッチモンド・スクールへ入り、テイト校長の家に寄宿生として世話になる。1846年には、ラグビー校へ入学し、3年間で学した。1949年の終りにクロフトへ戻ると、父親と同じオクスフォード、クライスト・チャーチに入るための準備をする。1850年5月23日には、入学許可が下りた。しかし、学部生のための部屋には余裕がなく、空きを待つことになる。学生も教官も学寮に住み勉強、生活をするため、住む部屋がなければ、入学は許可されても自宅待機することになる。そこで再びクロフトに戻ってきた。大学に入る前の、気楽な7か月は、後になってみれば、彼にとって母の傍で過ごす最後の時間となった。

母、フランシス・ジェインは翌1851年、1月26日午前3時に亡くなった。これまでわかっている伝記では、キャロルはクライスト・チャーチの父の友人で学寮内の自分の部屋の一部を使わせてくれることになったジェイコ

ブ・リーの元に来て、1月24日にコモナー(自費学生)として登録をすませ、その2日後に母の悲報を受け取り、急いでクロフトに戻ったということになっている。しかし、今日、キャロルのすべての遺品と著作権の管理者であるフィリップ・ドジスン・ジェイクス氏の元に残されている記録の中には、キャロルの妹マーガレットの手で、「今日母が亡くなった。チャールズ(キャロル)はオクスフォードへ戻った。」という記載が見つかっている。このメモが果たしてどんな意味をもつものか、別に改めて検討したい。

クロフトの教会は、「聖ペテロ教会」という。建物はすぐ脇を流れるテイーズ川から掘り出したといわれる赤と白の砂岩でできており、一部は遠くアングロ・サクソンの時代に遡る。また外壁にはローマ時代の印が残る。アングロ・サクソン時代の教会はその名前に「聖ペテロ」または「聖ペテロと聖パウロ」の名前を冠したものが圧倒的に多い。それぞれの聖人に捧げてその庇護を願ったものである。1066年のノルマン征服以後、その影響は遠く北のこの地方の教会にまで及び、根こそぎの打撃を与えた。クロフトの教会は、建物の部分部分に古い時代の痕跡を残している。

キャロルの父がクロフトの聖職碌を与えるとの知らせを受けたのは1843年1月12日、時の首相ロバート・ピールからであった。手紙の最後には速やかに着任するようにともあった。そこで、クロフト教会への昇進のため強く働きかけてくれたリポンの司教ロングリーの元へ行き、そこからの日帰りですべてクロフトの地を訪れている。その時の印象は弟ハッサード・ドジスンに宛てた手紙で伝わっている。それによれば、教会の布教活動がかなり等閑にされているという印象を受けたようで、着任後は、やるべきことを実行に移していく。それがために、地元の有力者であり、先祖代々

教会のパトロンであるウィリアム・チェイター卿と悉く対立し、しかも妥協をしなかった。具体的な内容については、M.Y.アシュクロフトの編纂した*Papers of Sir William Chaytor* (1771~1847) の中の22通の手紙(1844年1月15日から翌年3月15日の間に交された)に詳しい。

この手紙の記録から直ぐに連想されるのは、キャロルとテニスンの間の激しいやりとりである。こちらの方はことばじりを捉えて、相手の意図を汲もうとしない双方の短気なところがもろにぶつかっているのだが、サー・ウィリアムとドジスン師のやりとりはどうみても、地元の有力者の長年の馴れからくるわがままに対して、新任の牧師は一步も譲らず、教区監督牧師としての信念を貫いた。それにしても、前任者のジェームズ・ドールトンがいかに従順にこのパトロンの言いなりになっていたか、手紙の1つにうかがえる。サー・ウィリアムの意を受けて新聞には、ドジスン師中傷の投書まであらわれた。パトリオット新聞に載った『ピュージー主義に対する反発』と題する記事の一部をみよう。

The late Mr D—rector of this place was a kind-hearted and benevolent man, in relation, at least, to the temporal wants of his flock. He was a clergyman, however, of the old school, and never troubled himself about either Puseyism or any other izm's, and lived on terms of good neighbourhood with the few dissenters who happened to reside in the little village. His successor is a man of a very different stamp - a rabid churchman intent upon crushing any form of dissent which may dare to appear within his precincts.

ここでD-牧師とは、前任者のドールトンのことである。「故D-師は心のやさしい、有徳の人物でした。少なくとも教区民のその時々

必要に対しては。師は伝統的な教えに基づく牧師で、ピューリー主義だのその他の如何なる主義にも関わりがありませんでした。小さな村の中に意見の合わないものがいたとしても、その者たちと仲良くやっておりました。その後任者は、これとは全く違う狂信家で、自分の近隣に何か少しでも意見の違いのきざしがあれば、すぐさまこれを根絶してかかるような宗教家であります。」

後任の狂信家とは、ドジスン師を指している。記事のなかではさらに続いて、日曜日の教会のできごとを挙げていく。誤解と事実無根のことであるのは、ドジスン師が説明をするまでもなかった。意固地になったサー・ウィリアムはたまりかねてリポンの司教に手紙を書く。しかし、こちらからも冷たく一蹴されるといふ一幕もある。書いた手紙の内容は、ドジスン師の説く教義が、今様のピューリー派（オクスフォード運動と一致する）に属するもので、英国国教会の教義に反する、というものだった。これに対して1845年1月9日付けでリボン司教のロングリーはサー・ウィリアムに対して次のように答えている。

... I am sorry [your letter] should contain a request which neither my duty nor my inclination allow me to comply with ... I have now known [Mr Dodgson] intimately for upwards of twenty years. I had opportunities of being well acquainted with his ministerial character during his seventeen years incumbency at Daresbury; and the means of more close & intimate acquaintance with his theological opinions during the eight years he has acted as my examining chaplain - and I can most confidently affirm that he is a thoroughly sound & orthodox divine of the Church of England, and an uncompromising opponent of the errors of the Church of Rome.

「お手紙にあることは、私の職務からいっても、心情からいっても賛同しかねることで。… ドジスン師については私は20年以上にわたり親しくし、よく存じております。

教区で彼がその勤めをどのように果たしているかは、過去17年に及ぶグーズベリ在任時代を通じて十分に見聞しております。さらにリポンの私の下では7年間審査司祭を勤めてもらっております。以上のことを通じて、ドジスン師が英国国教会の聖職者として、非のうちどころ無く健全かつ伝統的な信条の持ち主であること、またローマカトリック教会の過誤に対しては、妥協しない者であることを、私は自信をもってお伝え致します。」(Papers of Sir William Chaytor p.306)」

前任者ジェイムズ・ドールトン時代の聖ペテロ教会は、「説教は日曜日に一回。そのため教会へ行けるのは朝の礼拝だけ。教区民は700人を上回るが、教会にきている子供たち、つまり何らかの宗教教育を受けている子供たちは、わずか35人。聖餐式は年に5回だけ」となっていた。ドジスン師にすればこれは憂うべき状態であり、その改善に乗り出したことを、狂信的と非難され、チェイター卿との意見の対立をきたし、従来やり方に固執する卿の主張を無視した結果、中傷を受けたからといって挫けてはおられない。リポンの司教ロングリーからの信頼と後だては心強かったにちがいない。

クロフト教会の建物の内部は、身廊の北側にミルバンク家のための特別席が中空に張り出している。現在はクリスマスページェントの折りに空に天使が現われて歌をうたう場所として使われているくらいで、実際の礼拝席としては使用していない。濃い赤のピロードのカーテンが付いて、正面の説教壇に対しては横向きに見下ろす格好になっている。このような席で礼拝をするのは不謹慎、という意識はなく、眼下で礼拝する貧しいものたちが

献金の前に周囲を見回してから財布を開けるという不敬な行為を防ぐ役にも立ち、またこうした特別席を教会内に確保して支払われる料金は教会の大きな収入源でもあった。1815年にアラベラ・ミルバンクと結婚したバイロンは蜜月を、ホルナビー・ホールで過ごしているから、日曜日には礼拝のためにミルバンク家のこの特別席に姿を見せたことがあるかもしれない。ミルバンク家の墓所は、北の翼廊の床下を占める。南の翼廊の方はチェイター一家の墓所になっている。歴史をたどると、クリストファー・チェイターが婚姻によりクロフトに根を下ろしたのは15世紀の初めのことであった。妻エリザベスはクレアボウ家唯一の女子相続人だった。この家系は、クロフトにあっては13世紀前半まで遡り、当時からクレアボウ家は聖ペテロ教会のパトロンである。婚姻によりクレアボウの財産と地位を引き継いだチェイター家は、今日に至るまでクロフトでその役割を守っている。

クロフトに赴任した時、ドジスン師は43歳の働き盛りであった。教区民に対する彼の熱心は、ナショナル・スクールの設立についてもウィリアム・チェイター卿と悉く対立をきたした。学校創立の報告書には、「チェイター卿は教区で教育のためご自身に任されている年4ポンド4シリング4ペンスの費用を、男子教員に預けられた」とある。言い替えば、英国国教会の教義に基づいて設置された学校の設立者で、監督責任者であった教会の主任牧師ドジスン師にではなく、その被雇用者たる一教員に任せたのである。(詳細は、『クロフト・ナショナル・スクール創立事情』(1995年笠井勝子)を参照。)チェイター卿とドジスンの対立は、著しくこじれたまま、しかし上述のリボン司教の手紙で両者の22通の書簡によるやりとりは1845年3月15日付けを最後に終わる。この年の10月7日にクロフトナショナルスクールは開校式を行ない無事にスター

トした。チャールズ・ドジスン着任の1年半後のことである。

サー・ウィリアムは1771年生まれでこの時72歳、キャロルの父チャールズ・ドジスは1800年生まれ、年齢の差は29歳で、年長者としては新参者に対する文句なしの服従、という期待感がすっかり裏切られたのである。

1856年1月2日、キャロルは日記に、「ジョン・チェイター氏と食事をした。こんなことをしたのは初めてだ。ジョンソン氏と息子さんの奥さん、それにシンプスン氏に会った。思っていたよりも楽しい人たちだった。」と書いている。「こんなことをしたのは、初めて」ということばで、父親同士の不仲のために、次の世代も交流がなかったことがわかる。ウィリアム・チェイターは1847年に亡くなっているが、このような機会が訪れるまでに9年間かかったのである。息子のジョン・クレアボウ・チェイターは1806年生まれであるから、むしろキャロルの父に近い年齢であった。

1950年3月、牧師館の改装工事の際に、3階の床下から、写真に見るような品々が出てきた。おそらく、越してきて寝室の天井を上げた時に、そこへ置いたのであろう。教会の祭壇脇の小部屋に保管され、特別に取り出して並べられた(写真3)。

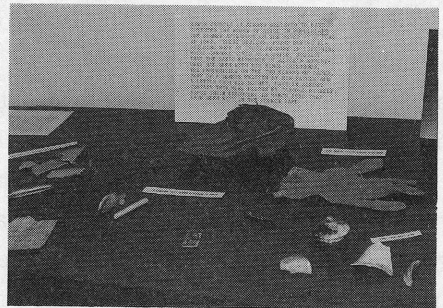


写真3 クロフト牧師館床下に納められていた品々

ヘアピン、ままごとのティーポットの蓋、子供用の刺繍の入ったハンカチ、小さな白っぽい素焼きのパイプ、折り畳みの小型ナイフ、

母親の筆跡とされる紙切れ、説教の断片、ロブスターの甲羅、クロシェ編のピン、スクラブルのS、キャップ形金属の指貫、子供用白いレースの手袋片方、黒い子供靴左片方。ダースベリから引っ越してきて改修工事をした時に、家族ひとりひとりに関わる品を床下に、それこそおまじないのように納めたもので、子供のキャロルが入れたといわれている。しかし、そうならば、ここに数えるものは、全部で13点である。1843年に移ってきた一家は、この年ダースベリで生まれたヘンリエッタを入れて子どもたちは10人、両親共で12人家族であった。この後、クロフトで末っ子のエドウィンが生まれているが、それは1846年である。とすると、13番目はだれだったか。ダースベリから使用人のうち一人だけ家族と共にクロフトへ移ったものがある。ヴァインという名前の女性であった。おそらく、この人を含めて、新しい牧師館の生活を始めた家族をこの品々が象徴しているのであろう。

当時11歳だった少年に、創作の花を咲かせる将来への予感があったのか、それはわからないが、床下からあらわれた品々の中に、その後生まれた物語の道具立てはそろっている。

### 3 オクスフォード

クライスト・チャーチ学寮の正門は、夜9時のグレイト・トムの鐘の音とともに閉ざされる。鐘は学生の数だけ、101回鳴る。このトム・ゲイトからマーキュリの噴水を右手に見て、左奥へ廻っていくと、右手裏の建物が図書館である。一階は受け付けの机に司書がおり、左右に閲覧室がある。二階は2、3階を合わせた高さで、天井まで書架が届く。ガラスのケースが2、3と、机、コピー機が隅にあるほかは、何もない広間である。キャロルが司書に相当するような仕事をしていたというサブ・ライブラリアンの仕事場は、この広

間を囲む南側の部屋の一つで、窓からは学寮長館の庭が望める。さらに階段を上ると最上階は、シャッターを下ろして徹くさい書架が並ぶ書庫になっている。アリス・リデルの外出着を奥から出して見せてもらった。裾は後にやや長いが、上半身から推測すれば、小柄な人であったらしい。海老茶色というか、赤味を帯びたチョコレート色の服で、裾裏には、保存のため薄い当て布が荒く留めてある。結婚する前、彼女が学寮にいた当時のものであるという。

キャロルの資料は2階のガラスケースと鍵のかかった専用の本箱に収まっている。昨年9月に司書の交代があり、現在、資料は予め請求をしておかなければならないし、出された書籍は1階の大机で、古代の大法典を広げているそばで、ノートを取ることになる。相当調べ尽くされたドジスンならびにリデル家の資料でも、出版になっているものは一部にすぎない。特に、キャロルがアリス・リデルに与えた写真アルバム、ラスキンに手ほどきを受けていたアリス・リデルの描いた水彩画帳2冊、アリス・リデルがこどものころに収集した著名人らのモノグラムをきれいに張り付けたアルバム、リデル学寮長の退職の際に記念品を送った関係者の氏名を連ねた目録のアルバム、キャロル自身の手になる写真のグラス・プレート9枚、それにテニスンが絶賛したと伝えられる「乞食姿のアリス・リデル」の写真。これは革製で両開きになっている赤茶色の特別なケースに収めてある。写真はキャロルが頼んで着色をさせたもの。これらは、初めて直かに目にするものであった。当時、ギリシャ、ローマの歴史、美術に造詣が深いとされたジョージ・リデルを父とし、絵画はラスキンの手ほどきを受けたというアリス・リデルの水彩画集が2冊ある。風景画がほとんどで、一部に人物のスケッチがある。画集の一つはブルー一色の濃淡で樹木や山、

湖水を描いている。写実的で遊びがないため硬い印象はあるが、端正な画風であった。

今回の調査の対象は、キャロルが残したスケッチと手紙で有名になったガートルード・チャタウエイが、その晩年81歳の時に書いた『ルイス・キャロルの思い出』Memories of Lewis Carroll by A.G. Atkinson (Mrs. T.D. Atkinson) である。アトキンソンというのは、ガートルードの結婚後の姓である。クライスト・チャーチ図書館所蔵のものは、1948年3月13日のハンプシャー・クロニクルに掲載したものを、縦横17cm×9cm、表紙を含めて8頁の冊子としてリプリントをしたものである。頁は3から始まって7まで、Three, Four, の文字でそれぞれの頁下にはいつている。キャロルの手紙、特にこどもに出した愉快な手紙を編纂し、出版したのは、エヴリン・ハッチによる手紙集が最初のものである。その中に納められたガートルードまたは母親宛の手紙は全部で9通あるが、1948年のガートルードの『思い出』には、そこに入っていない手紙3通と彼女自身の回想録がついている。書きだし部分は1874年の夏、ワイト島のサンダウンである。2階のベランダで朝の空気を胸いっぱい吸い込むキャロルと、その姿を見つけて隣家のベランダに飛び出してくる少女ガートルードとの出会いの描写が始まる。Imagine the sea-side at Sandown in the Isle of Wight, where lodgings stretched along the front each with its balcony on the upper floor and standing in a little garden with steps leading down on to the shore. Imagine a little girl about 8 1/2 absolutely entranced with the lodger next door. To her he seemed quite an old gentleman. In the morning he came out on to his balcony breathing in the sea air as if he could not get enough; and whenever she heard him coming she would rush out on to the bal-

cony to see him. After a few days he spoke to her: "Little girl, why do you come so fast on to your balcony whenever I come out?" "To see you sniff." she said. "It is lovely to see you sniff like this" --- she threw up her head and drew in the air.

Thus began a long friendship which ended only with his death.

「あれは、ワイト島のサンダウンの海岸でした。夏の家はどれも2階にバルコニーがついていて、庭があり、庭からは浜辺へ下りる段々がついていました。女の子は8歳半でした。そしてお隣の人に興味津々。その子の目に移ったお隣さんはずいぶん年配の紳士に見えました。朝になると、その人はバルコニーに出て海の風をいっぱい、どんなに吸っても吸い足りないみたいに、吸い込んでいました。いつも、その人がバルコニーに出てくる音がするとすぐに、それを見ようとして女の子は自分の方のバルコニーに飛び出していくのでした。何日か経つと、その人は女の子に話かけました。「おじょうちゃん、どうしてはくがバルコニーに出てくるとそっちのバルコニーへ飛び出すの?」「おじさんが、息をいっぱい吸うのをみるためよ、こーんなにして」——そういうと女の子は顔を空に向けて空気をうーんと吸ったのです。

こうして始まった長い交流は、死が終わりを告げるまで続きました。」

モートン・コーエンが1979年に出版した1156頁の手紙集は、ガートルードに宛たキャロルの手紙を20通収録している。最初の手紙は1875年10月13日にクライスト・チャーチから出したもので、ガートルードが9歳の時であった。コーエンの手紙集にある最後の書簡は、1895年1月1日にギルフォードのチェスナッツから出したものである。ガートルー



ド・チャタウエイは1866年に生まれ、1951年に亡くなった。キャロルとの出会いから最後の手紙まで、交流は実に20年に及ぶ。『思い出』の最後の部分で彼女は、そのことにふれて、次のように書いている。

Many people have said that he liked children only as long as they were really children, and did not care about them when they grew up. That was not my experience; we were warm friends always. I think sometimes misunderstandings came from the fact that many girls when grown up do not like to be treated as if they were still 10 years old. Personally I found that habit of his very refreshing. I did not see him often in the last years of his life because I was so much of the time abroad; but the memory of him will always be a very great happiness to me.

「多くの人は、ルイス・キャロルについて子どもにしか関心がない、子どもの時を過ぎて大人になったものたちのことを心にかけない、と言っています。わたしの経験からいいますと、それは違います。キャロルとわたしにはいつも暖かい友情がありました。キャロルに対して誤解が起きるのは、女の子はたいへん大人になると、いつまでも10歳のこどものように扱われたりするのを好まない、ということだと思います。私自身は、キャロルのそんなところが、とても新鮮に感じられました。彼の晩年には、わたしは外国にいたことが多かったので、あまり会うことがありませんでした。でも、ルイス・キャロルの思い出はいつまでも私にとって大きな喜びでありましょう。」

キャロルがクライスト・チャーチで住んだ部屋はトムクオッドを囲む北西の一角にあるステアケイス7を上がった3階と4階である。

窓からはセント・オルデイツ教会を斜向かいに見ることになる。一部屋のサイズは格別に大きいものではないが、複数の寝室、書斎、居間、食堂、クローゼットなどが2つの階にまたがっており、内階段で続いている。部屋の外の廊下の突き当たりにある4号室がダーズベリ以来の友人で、先輩のトマス・ヴィア・ベインの部屋であった。キャロル、というよりもチャールズ・ラトウィッジ・ドジスンが占めていた部屋はクライスト・チャーチの中でも一番上等で、彼の前の住人はビュート卿といった。

#### 4 ランダドノウ

北ウェールズのランダドノウはヴィクトリア期から既に著名な保養地で、キャロルよりもアリス・リデルに多くの関わりを持つ土地である。そもそもはアリスの父であるヘンリー・ジョージ・リデルが、1846年に妻ロリーナと新婚旅行でこの海浜の地を訪れたのが始まりだった。1861年の復活祭に、夫妻は8歳のアリスを含む5人の子を連れて、ノース・パレードの館に滞在した。これが現在のセント・タドノウ・ホテルである。この周辺は、今日訪れると、海岸のプロムナードに沿ってホテルや商店の立ち並ぶにぎやかな通りで、いかにも「海浜保養地の女王」と称されるにふさわしいリゾート感覚にあふれている。オクスフォードのクライスト・チャーチ学寮長であったアリスの父は、よほどこのランダドノウが気に入ったらしく、この年、先に訪れた北海岸とは反対の西海岸に土地を買い、翌年にはゴシック様式の邸宅を建てた。「ペンモーファ」(Penmorfa)と呼ばれたこの屋敷は後年売却され、現在は改装されてゴガス・アビー・ホテルとなっている(写真4)。

かつてこのペンモーファには、グラッドストーンやマシュー・アーノルドら、そうそう

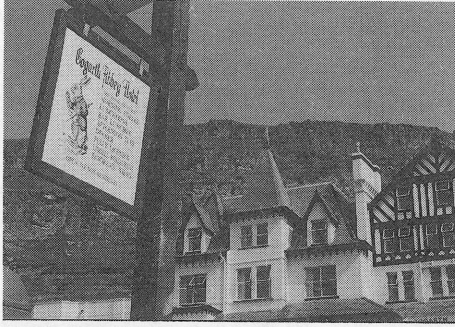


写真4 ゴガース・アビー・ホテル

たる人物が訪れたのだが、肝心のキャロルについては不思議なことに、あまりよくわかっていない。1858年から1862年にかけてのキャロルの日記は、周知のように現存しないし、現存するそれ以降の分にはランダドノウに関する記載は見つからないのだ。本人の証言が得られない以上、周囲の証人の言葉に耳を傾けるしかない。デレク・ハドスンの伝記によると、アリス自身がキャロルとランダドノウで遊んだことを記憶していたという(邦訳『ルイス・キャロルの生涯』p.125)。もっともこれは資料的にも不確かで、ハドスン自身この件に関しては、かなり懐疑的な態度をとっている。ランダドノウで「ラビット・ホール」を営むミュリエル・ラトクリフは、当時ペンモーファを訪れて、リデル3姉妹の肖像を描いた画家のウィリアム・リッチモンド(William Richmond)が、画を制作中にキャロルがいた、と後年回想したことを紹介している。だが同時に、アリスの姉、ロリーナがキャロルは来たことがないと語っていることも紹介され、結局確証は得られないというのが実情なのだ。

来たという証拠がないかわり、来なかったという証拠もないのだが、實際上キャロルの来訪が否定的に扱われるのは致し方ない。ところがそれにもかかわらず、現在ランダドノウの町はキャロルとの関係を主張するモニュメントであふれている。ゴガース・アビー・ホテルのそばには、1933年に建てられた白ウ

サギの像があるが、その台に刻まれた碑銘は、‘On this very shore duing happy rambles with little Alice Liddell, Lewis Carroll was inspired to write ...’「幼いアリス・リデルを連れて、この海岸を散策中にルイス・キャロルの脳裏に物語が浮かび・・・」と読めるし、海岸沿いのさらにその先にある救世主の教会には、1912年に奉納された洗礼盤があり、それは「ランダドノウをこよなく愛したルイス・キャロルに捧げる」ものとされている。ハドソンは、R・L・グリーンのようにキャロルの来訪を完全に否定してはいないが、それでもランダドノウの観光産業ぶりを「お国自慢」の「空騒ぎ」と揶揄している。何れにせよ、決定的な資料が見つからない限り、この問題は今後とも研究の課題として残るであろう。

ところでまったく別の観点から、しかしある意味で正統の文学的な視点から、キャロルとランダドノウの関係を考える試みがある。それは伝記的資料ではなく、作品自体にこの地の面影を求めるもので、例えば『アリス』の中に背景として見られる海岸の景色とランダドノウの類似を指摘する試みである。『アリス』で海辺が描かれるのは2箇所、『不思議の国』の第9章、にせ海亀の場面と、『鏡の国』の第4章、セイウチと大工の場面だ。どちらの場面にもテニエルの挿画がついており、それを見ると、実際にゴガース・アビー・ホテルの前に広がる砂浜は、前者の巨大な岩のころがる海岸とはかなり違うが、後者の荒涼たる砂浜とは驚くほどの類似が感じられる。にぎわう北海岸と対照的にひっそりしたコウニイ湾を望む西海岸の、さらに北端に位置し、ごつごつした岩肌をむき出しにしているオルム山を背にしたゴガースの景観には、一種異様な、この世ならぬ雰囲気がある。海とはいえ、巨大な湖のように静まりかえり、水面は鏡のようにたいらでほとんど波はたたず、あ

まりの遠浅に、潮が引くと、海が消失して新たな陸地が出現したかと思われるほど広大な、眺めていて途方に暮れるほどの浜辺が現れる。それは、あたかも彼岸の風景を眼前にしているかのような錯覚を覚えさせ、テニエルの極めて精緻ながら幻覚的な画の世界と共通したものが感じられる。無論、ここで大切なのはテニエルにこれだけの幻想風景のイメージーションを与えた、キャロルのノンセンス詩の威力である。真夜中であるにもかかわらず太陽が照り輝く、この海岸の風景の不気味さと、荒唐無稽な会話を繰り広げながら悲嘆に暮れて泣き続ける大工とセイウチの姿の異様さ。(『不思議の国』の中で、にせ海亀も海岸でぼろぼろ涙をこぼしているのは偶然の一致か、あるいはキャロルにとって海や砂浜は必然的に涙を催す場所だったのか、これもまた興味深いことだ。)もちろん、キャロルがインスピレーションを得た可能性のある海岸はランダドノウには限らないし、テニエルがランダドノウをモデルにしたか否かに至っては、キャロルの方よりも立証が困難だ。それでもやはり、このランダドノウの西海岸をあてもなく散策していると、たまに砂浜でじっと寝そべって、この世の時間から取り残されたように日光浴している人たちが、『不思議の国』や『鏡の国』の住人のようにふと感じられることがあり、『アリス』の原風景の一つとして、この地を訪れるのは無益でないと思わせる。ペンモーファが建てられた1862年は、『不思議の国』の契機となる例の「黄金の昼下がり」の舟遊びが行われた年であり、リデル家がこの屋敷を手放した1871年は、アリスに対する訣別の辞ともいえる『鏡の国』が出版された年である。

## 5 イーストボーン

イーストボーンとキャロルの関わりは1877

年、彼が45歳の夏に始まった。夏を潮風の中で過ごすために海岸を訪れる人々の中には1か月、2か月の単位で間借りをするものもあり、キャロルもそのひとりであった。グランド・パレイド44のグローヴナー・ハウスに宿泊して家を探していたキャロルは7月31日にラシントン通り7番地のベンジャミン・ダイアー夫妻の家(写真5)を見つけると、バルコニーのついた2階の居間と続きの寝室を借りて、食事と身の回りをダイアー夫人に世話をしてもらうことになる。



写真5 イーストボーン、ラシントン7番

キャロルはこどもたちをオクスフォードへ招くこともあったが、イーストボーンへは、それよりもさらに長い期間滞在させて、聖書の勉強、歯医者通い、砂遊び、散歩、水泳の練習、芝居、音楽会を取り入れた規則的な生活をさせた。小さなこどもが暮らすためのめんどろは、家主の奥さんがみてくれた。ラシントン通りの家は、海辺に直接面してはなかったが、海は近く、日曜日に通う教会も歩いて15分ほどの所にある。クライスト・チャーチという名前の教会で、地元の石を利用した、古風で珍しい建物である。

ロンドンから招いたこどもの中に、イーザ・ボウマンがいた。彼女はイーストボーンで過ごした時のことを『ルイス・キャロルの思い出』(The Story of Lewis Carroll told for Young people by The Real Alice in Wonderland, 1899, 後の出版では Lewis Carroll As I Knew Him と書名が変わる)

に綴っている。初めの書名『不思議の国のほんとうのアリスが語るこどものためのルイス・キャロル物語』は、イザベラ・ボーマンがロンドンのグローブ劇場で、『不思議の国のアリス』の主演を演じたということからついたと思われる。後にそれを『ルイス・キャロルの思い出』と改めたのは、アリスのモデルがアリス・リデルであったことを知ったためであろう。

イーザの好きな日課はラシントン通り7番の家から近いデヴォンシャー・公園プールで水泳の練習をすることだった。キャロルはその後で必ず歯医者へ行くことを条件にして、水泳をさせていた。毎日歯医者に行つて歯石を取り、生涯丈夫な歯をしていることをキャロルはこの時イーザに身につけさせた。1899年の『ルイス・キャロル物語』の中で彼女は次のように述べている。

He had great ideas upon the importance of a regular and almost daily visit to the dentist. He himself went to a dentist as he would have gone to a hairdresser's, and he insisted that all the little girls he knew should go, too. The precaution sounds strange, and one might be inclined to think that Lewis Carroll carried it to an unnecessary length; but I can only bear personal witness to the fact that I have firm strong teeth, and have never had a toothache in my life.

「キャロルは規則的に、できれば毎日歯医者へ行くことが大切だ、と考えていました。自分でも、歯医者には散髪に行くのと同じくらいに通っていました。そして、こどもたちには、しっかり歯医者に行くようにと、うるさく勧めるのでした。この用心は余計に思えるでしょうし、ルイス・キャロルは度が過ぎると思いたくなるでしょう。けれども、私自身これまで歯が丈夫で、歯痛ということを経

験したことがなかったのは、キャロルのおかげであり、彼が正しかったことの証になっていると思います。」

イーザが歯医者の前に通っていたプール(Devonshire Park Baths)は現在使われていない。間もなく取り壊されてその姿を消すことになっている。こどもたちと遊び、こどもたちをスケッチし、お話を聞かせたキャロルは、歯医者例にみるように、ただ優しいだけの大人ではなく、よい生活習慣を身につけさせた。

その一方で、こどものプライドを傷つけることをしないように配慮した。イーザがイーストボーンで過した頃の日課について、彼女は次のように書いている。

There was one regular and fixed routine which hardly ever varied, and which I came to know by heart; and I will write an account of it here, and ask any little girl who reads it, if she ever had such a splendid time in her life.

To begin with, we used to get up very early indeed. Our bedroom doors faced each other at the top of the staircase. When I came out of mine I always knew if I might go into his room or not by his signal..... Then we used to go downstairs to breakfast, after which we always read a chapter out of the Bible. So that I should remember it, I always had to tell it to him afterwards as a story of my own.

イーザの話では一日の日課がさらに続いて、とりわけ好きではないのに必ず行かされた午後の散歩でビーチイヘッドというところまで往復歩いたこと、その途中疲れると腰を下ろして、ハンカチで動物を作つて遊んだこと、森に住む妖精の話に耳を傾けたこと、ビーチイヘッドの岬にある海岸警備小屋に着くと、お茶とロックケーキをおやつに食べたこと、

しかもキャロルは「イーザはいつも食べすぎると言ってケーキは一つお茶は一杯しか許してくれなかったことなどを書いている。

さらに次のくだりは、夕方家に戻ってきてからのことであるが、

We generally got back to dinner about seven or earlier. He would never let me change my frock for the meal, even if we were going to a concert or theatre afterwards. He had a curious theory that a child should not change her clothes twice in one day. He himself made no alteration in his dress at dinner time, nor would he permit me to do so. Yet he was not by any means an untidy or slovenly man. He had many little fads in dress,....

「7時頃までに夕食に戻ってきます。キャロルは絶対に食事のために服を着替えことをさせませんでした。たとえその後で音楽会やお芝居に行くような場合でも。変わった考え方をしている、こどもというものは一日のうち服を取り替えるものではない、というのです。自分でも、食事の前に着替えることをしませんでしたから、私にもそうさせなかったのです。けれども、服が乱れていたり、だらしなかったり、という人では決してありません。服装には、いろいろと小さなこだわりをもっていました。」

この箇所について単純に読めば、おそらくキャロルの牧師館育ちというものからくる、生来の質素の気風の現われ、と想像される。ところが、イギリスの、例えば『キャロルの伝記』や『アリス・リデルの伝記』を著わしているアン・クラーク・アモーに尋ねると、まったく別の解釈をおこなっている。アン・アモーは、「この時代、舞台に出ている子役たちは貧しい家庭の子どもであったということが、前提にある。つまり、イーザがイーストボーンに来たときに、その鞆の中にどれほど

の着替えがはいつていたか。さらに、キャロル自身は身ぎれいで、服装には気を使う人であったということは、いろいろな人が証言しているのである。とすれば、服を取り替えないようにさせたのは、むしろ数少ない衣服のことで、小さなイーザに肩身の狭い思いをさせないようにするためのキャロルの配慮とみえる」と。確かにこれが的を得た解釈であろう。

1877年から亡くなる前年、1897年の夏まで、20年の間、イーストボーンはキャロルにとって、また、招かれた数多くのこどもの客人にとって、思い出多い幸せの海辺になった。

妹たちの住むギルフォードへ向けて、キャロルが最後にイーストボーンを立ったのは、1897年10月14日木曜日のことだった。

## 6 ギルフォード

今日、キャロルの終焉の地として知られるサリー州ギルフォードは、彼にとってクロフトから移って以後30年近く住み、結果的に半生を過ごした土地であり、自宅のあった場所としては最も長く、それだけ結びつきの深いところである。オクスフォードに奉職して以後、キャロルの活動の拠点がクライストチャーチであったことは周知の事実だが、その間もクロフトの自宅に帰ることは決して少なくなかった。毎年クリスマスと復活祭、それに夏休みの間はイングランド北部にあるこの自宅で、兄弟姉妹と共に過ごすのが習慣となっていた。こうして住み慣れたクロフトの牧師館を引き払うことになった第一の理由は、父チャールズ・ドジスンの死である。母フランシス・ジェインは、既にキャロルがクライスト・チャーチに入学してまもなく死亡していた。こうして、長男であった36歳のキャロルは、1868年からドジスン家の家長としての責任を負うことになったのである。当時クロフト

トの家には、上は40歳から下は25歳までの未婚の姉妹が7人と、おばのルーシーがいた。キャロルは6月21日の父の訃報を受け取って以後2ヶ月ほどクロフトに滞在し、8月にはギルフォードに家を見つけ、9月にクロフトを引き払って、11月にはギルフォードの家へ移っている。キャロルという人物は、その少女愛や、彼自身のいつまでも青年のように若々しい白皙の肖像写真から、ひたすら研究と文学とに閉じ込められ、実際上の生活では無能であったようなイメージさえ持たれるが、それは誤りである。オクスフォードでの彼を観察すると、意外に社交的で活発であるうえに、後には学寮運営に関して大胆不適とも思える反骨の行動も起こすし、教授社交室の運営にも関わって成果を上げていた。ギルフォードへの転居に関しても、彼は家長としての責任を十分認識し、まことに素早い決断と行動力を示しているのがわかる。

25年間、住み慣れ、ダズベリ以上に故郷と感じ、父母の魂が眠っているクロフトの地を離れることは容易でなかったと予想されるが、オクスフォードからあまりに遠すぎるといふ理由に加え、キャロルの胸中には新天地を求める積極的な気持ちもあったに違いない。当時彼は『不思議の国』を刊行して世に名声が広まり始めている頃で、第2作の『鏡の国』の構想を練っている最中だった。柳の下のだじょうでは済まないという強い信念に、苦吟していたことが察せられるが、転居は想像力にも刺激を与えてくれたことだろう。幸福は常に思い出の中にある、といういかにも内省的で、老人の感慨にも似た言葉は、彼の晩年だけでなく生涯につきまとい、実際、旅行好きというわけではなく、一所に落ち着くタイプではあったが、それと同時に彼は、写真術を始め、新奇なものにいち早く興味を示し、また何よりも「冒険」好きな少年でもあった。

ギルフォードを選んだことについては、オクスフォードやロンドンからの交通の便とか友人ポータル (G.R. Portal) らの勧めとか、色々理由は挙げられるが、そもそもクロフトという北国から正反対の南方へ眼を向けたのはやはり心機一転の想いがあったと考えられる。その効果を示すように、ギルフォードへ移った翌年の1869年早々には、ノンセンスではない「真面目な」詩を含む初の詩集『幻想魔景』の出版に及んでいる。

ギルフォードにおける家探しの様子は、キャロルの日記に詳しく記載されているし、ギルフォード・ハウス・ギャラリー発行の‘Lewis Carroll in Guildford’にも簡にして要を得た説明があるからここでは省くが、最終的にキャロルは「チェスナッツ屋敷」に決めた (写真6)。



写真6 チェスナッツ屋敷

ハドスンが「人形の家のような」と評している、この小高い丘の上の屋敷は、1868年当時の写真で見比べても、全体の形がダズベリの牧師館と似ているように思われる。チェスナッツ屋敷はもちろん今日もほぼそのまま残っており、個人所有のため内部の見学はできないが、門柱には記念のプラークがはめ込まれている (写真7)。

このチェスナッツ屋敷のそばにはギルフォード城が荒れ果てた姿で残されているが、かつてジョン王やヘンリー三世に愛されたというこの街は、今日歩いてみても、いかにも古くからの歴史と文化の染み着いた上品な奥ゆ

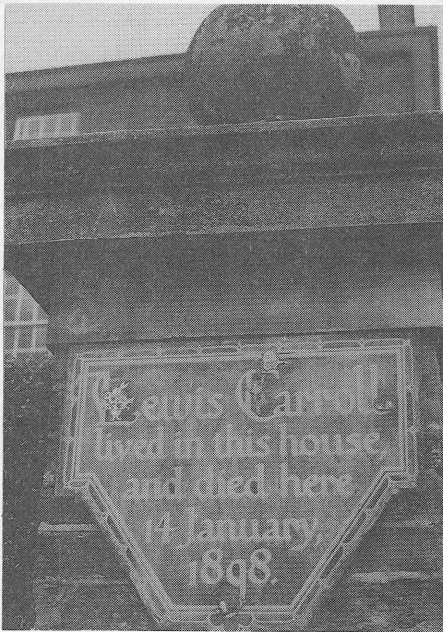


写真7 チェスナッツ屋敷のプラーク

かしさを感じさせ、その中に、古風な街並みゆえの一種物悲しい雰囲気がある、当時キャロルが気に入ったのも納得できるのである。

このギルフォードへ転居してから3年後の1871年のクリスマスには『鏡の国』が出版され、大好評で世に迎えられた。『不思議の国』と『鏡の国』の比較は、キャロルの研究において永遠のテーマの一つだが、前者の自然発生的な自在さに比べ、後者の透徹した知性による完璧な制御は、しかし、一層の論理的洗練の中に透明で神秘的な抒情さえ随所に秘めており、その点で、父の死やギルフォードの風土の影響を考える必要もあろう。ある意味で『不思議の国』はキャロルの外部にあったが、『鏡の国』は彼の内部にある。『不思議の国』で彼を導いた詩神アリス・リデルとは、この頃、キャロルとリデル家の関係が悪化していたために、思うように会うことができなくなっていた。それに加えて、幼い頃より人生の支えだった父の死を見つめ、一家の長としての自分の立場と役割を認め、新しい土地

で、彼はそれまで以上に、というよりも、それまでとは違った形で、自分の内部を見つめなければならなかったのである。その結果、まさしく自分を見つめるものとしての「鏡」を通り抜けて、鏡の奥のもう一人の自分と、鏡の国という新たな可能性の世界を見いだしたのである。

ギルフォード城の庭園の内部にある小高い丘には『鏡の国』の像がある(写真8)。



写真8 「鏡を通り抜けるアリス」の像

テニエルの挿画をもとにしているのは無論だが、良くみると姿勢はやや異なり、顔も実在のある少女をモデルにしたということで、挿画のアリスよりもやわらかい表情をしている。それはともかく、これは大変に美しい像で、単なる記念碑という以上に芸術的な独創性を感じさせる点で、キャロル関係のモニュメントの中でも一傑作と思う。鏡の部分は透明な強化ガラスが用いられているが、周囲の緑や空の青を映しこんで、像に色彩と陰影の無限の変化を与えている。この像を見る者はまず正面を見、それから裏へ回って、また正

面へ戻るだろう。鏡を通り抜けても世界は同じであることに気づくと同時に、この同じ世界に鏡のこちら側と向こう側とが重なり合っ  
て存在していることを悟るだろう。それは、  
この世は夢だが、夢こそこの世である、とい  
う認識と同じものである。

『鏡の国』の巻末には、かつての『不思議  
の国』の夏の日を回想する詩が掲げられてい  
るが、『鏡の国』の像のある庭園を出て、セン  
ト・メアリー教会の墓地へ向かう川辺には、  
白いウサギが走り去るのを見つめるアリスと  
姉の像がある（写真9、10）。



写真9 アリスと白ウサギ

こちらの方は、その髪型などから、テニエルの挿画ではなく、アリス・リデルの写真等を参考にしたと思われる。ウサギに眼をとられた一瞬の姿勢を生き生きと写し取った像で、ウサギの方もチョッキを着こんで時計を見ている姿ではなく、普通のウサギとして飛び跳ねている。その意味で、物語以前のアリスの姿だが、その均整のとれた構成や、無垢な感情をうまく表現したポーズと表情は、キャロルが撮影した少女たちの写真を彷彿とさせる。

キャロルの晩年は長い、と論ずる批評家もいる。1880年にはアリス・リデルが結婚し、結婚式への列席も拒まれ、それより少し前には少女の裸体写真が暴露され、写真撮影を止めざるを得なくなっていたし、翌1881年には数学教師も辞職しているからだ。それはギルフォードへ来て12年目、キャロルは40代の最後の年を迎えていた。以後66歳で病没するま

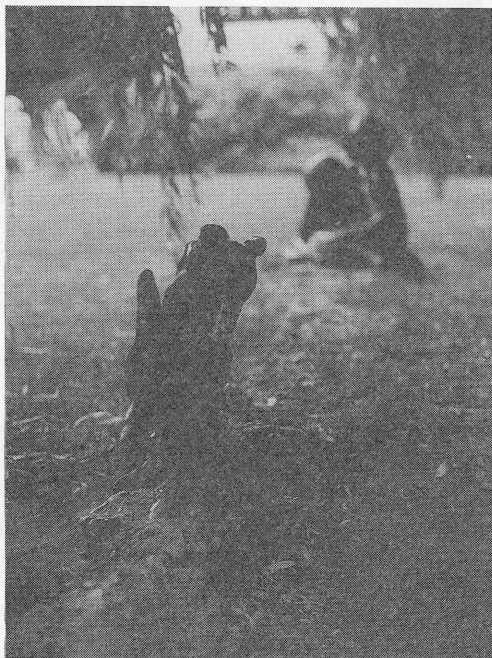


写真10 アリスと白ウサギ

で、著作の上でも『アリス』の世界から遠ざかる。無論実際は、『不思議の国』の原型となった『アリスの地下の冒険』や、幼児向けに書き直した『子供部屋のアリス』を出版したりしているが、文学の著作で見れば50代以降のキャロルは『シルヴィーとブルーノ』の完成に全力を注いだ。彼がこの作品に、それまでの彼らしからぬ愛や信仰を書き込んだことを、ノンセンスの退化と考える人もいよう。だが、見方を変えれば、センスを否定することによって『アリス』のノンセンスの世界を構築した彼は、ここでさらにノンセンスを否定し反転して・・・それはセンスへ戻ることではない・・・ノンセンスを超えた新たな世界の構築を目指しているとも言える。その意味では彼の創造的精神は最後まで衰えを知らず、あくまで文学世界の冒険者たらんとしたのである。

だがこれらの事情とはまったく別の意味で、キャロルの晩年はさらに早く1871年・・・『鏡の国』完成の年以降ということもできる。キ



チャロルはこの時既に遺言書を書いているのだ。これは財産処分に関するものだが、『鏡の国』が出版された翌年の1873年には、自分の葬儀に関する指示書も書いている。以後25年間、これらの書面をチャロルはそのまま保管し続けた。「墓石は小さく簡素なものを」というのが彼の希望だったが、今日見る彼の墓には、白い大理石の十字架が立てられていて、いつも訪れる人の花が絶えない（写真11）。



写真11 キャロルの墓

（執筆担当 笠井勝子 2, 3, 5）  
 （写真撮影 大八木敦彦 1, 4, 6）

これは1995年度文教大学女子短期大学部共同研究の助成による成果を報告するものである。

## Bibliography

- Amor, Anne Clark, *Lewis Carroll A Biography*. 1979, J.M. Dent & Sons Ltd.
- Amor, Anne Clark, *Lewis Carroll Child of the North*. 1995, The Lewis Carroll Society.
- Ashcroft, A.M. ed. *Papers of Sir William Chaytor*. 1993, North Yorkshire County Redord Office Publications
- Bowman, Isa, *The Story of Lewis Carroll told for Young people by The Real Alice in Wonderland*. 1899, J.M. Dent & Co.
- Chaytor, Sue, *St. Peter's Church Croft-on-Tees*. 1989, Croft P.C.C.
- Cohen, Morton N.ed., *The Letters of Lewis Carroll* 2 vols. 1979, Macmillan London Limited.
- Gardner, Martin,ed., *The Annotated Alice*. 1979, Penguin Books Ltd.
- Guildford House Gallery, *Lewis Carroll in Guildford*, 1989, Guildford Borough Council.
- Hatch, Evelyn M.ed., *A Selection from the Letters of Lewis Carroll to His Child-Friends*. 1933, Macmillan and Co.
- Hudson, Derek, *Lewis Carroll, An Illustrated Biography*. 1976, Book Club Associates.
- Ratcliffe, Muriel, *Alice Liddell, Lewis Carroll and Alice of Wonderland, The Welsh Connection*. 1991, The Rabbit Hole Ltd.
- Wakeling, Edward, ed., *Lewis Carroll's Diaries* vo.2. 1994, The Lewis Carroll Society: Publication Unit.
- 笠井 勝子『クロフト・ナショナル・スクール創立事情』1995年、文教大学女子短期大学部研究紀要第39集